

[曲名] Senza Confini

国境なし

[曲種] Overture

序曲

[作曲者] Giuseppe Manente

ジュゼッペ マネンテ

[編曲者] Jiro Nakano

中野二郎

作曲者ジュゼッペ・マネンテは正規の音楽教育を了えてから直ちに歩兵第60連隊軍楽長となり以後各地の軍楽長を歴任したが、

本曲はかの華燭の祭典、降誕祭の夜などを作曲した歩兵第3連隊軍楽長時代之等と前後して作曲されたもので

彼の作曲意欲最も旺盛な37、8才頃の作品である。

マンドリン合奏曲として本邦にもよく親しまれている晩秋、メリアの平原にて、はこの数年後に書かれたもので、この時代には吹奏楽の力作が多い。

本曲もペッシア（ピストイアの西方20キロ）の市民吹奏楽団に送られ1905年にフィレンツェのラピーニから出版された。

作者は各地赴任先の民間吹奏楽団を数多指導しているので思出のしるしとして書かれている。

独創的序曲と副題されているが、構想は序曲「今と昔」に類似し、主題の展開、転調の手法、対位旋律の配置、粉飾など作者の面影が至るところに顔を出す。

若し作者が自信のマンドリンオーケストラを持っていたならばメリアに匹敵する傑作が数多遺ったことであろうが、

我々マンドリン畑の者が考えるほどそのオリジナリティについての潔癖さは持っていなかったように思われる。

それは作者自身が吹奏楽を数多マンドリンオーケストラに編曲し、

又マンドリンオーケストラを吹奏楽に編曲して目見えていることなどから、推察されることである。

かの「メリア」がイル・プレットロ主催の作曲コンクールに応募した時の曲名は「最後の到着」

(Ultimo Arrivato) でその意味が十分に解明されていないが、

出版時に「メリアの平原にて」と改題されたものである。

私は現時点では、「色々試みたが此処に至った」という意味に解釈しているが、

本曲も俗に云う「音楽に国境なし」の意を曲名として贈ったもののようである。

1971年12月7日発行

イタリアマンドリン百曲選第14集より